

□書 評□

「肝 障 害」

—アルコール・薬物障害例とその病像—

〔著〕 千葉大学講師 伊 藤 進

東京医科歯科大学教授

武 内 重五郎

近年、アルコール消費量の急速な増加とともに、わが国においてもアルコールに由来する肝障害が臨床上の大きな問題となってきた。また、多くの新薬の登場により、それと平行して薬物による肝障害症例もしばしば遭遇されるところであり、現在肝疾患患者に接したとき、詳細なアルコール摂取歴と薬剤使用の有無に関する病歴聴取は不可欠のこととなっている。

このように、アルコールおよび薬物による肝障害に対する関心が高まっているとき、千葉大学 伊藤進博士により本書が刊行されたことは、きわめて意義深いことと思われる。伊藤博士はこれらの問題の重要性に早くから注目し、多数の症例について精細な観察をつづけ、すぐれた業績を発表してこられた方であるからである。

本書は、Ⅰ. 肝疾患の診断、Ⅱ. アルコール性肝障害、Ⅲ. 薬物性肝

障害、Ⅳ. 鑑別を要する疾患、の4部門より成っている。

Ⅰ. は肝疾患診断にさいしての総論的記述にあてられており、肝疾患患者に接したときの一般的心構えが著者の経験を土台として懇切に述べられている。

Ⅱ. においてはアルコール性脂肪肝、アルコール性肝炎、アルコール性肝硬変、アルコールの代謝と肝、アルコール硝子体の諸問題が取り扱われている。著者はまず、豊富な自験例のなかから適切な症例をえらび、その症例からどのような問題が浮び上ってくるかを明らかにしながらその疾患の概念をまとめあげてゆく、あるいは逆にまず疾患の概念を述べた上で、実際の症例を提示し、疾患概念を具体的に理解させるという方法をとっている。そして、読者に疾患の概念を十分に把握させてから、さらに臨床像、病理所見、予後、治療などを論じている。すべて、単

に他の研究者の業績の紹介のみにとどまらず、著者自身の経験に基づいた知見が述べられているので、記述に迫力が感じられるのである。

Ⅲ. の薬物性肝障害は、肝障害の頻度、薬物性肝障害の病型、薬物性肝障害症例と臨床、薬物性肝障害の病像、診断、治療、予防、薬物代謝と個体差・環境、薬物による肝微細構造の変化、などの項目より成っているが、この部の記述も、Ⅱとほぼ同様の手段がとられており、きわめて理解しやすい。読者がある肝障害例に接し、それが何らかの薬物によるか否かが問題となったとき、本書をひもとくことにより、およそそれに対する解答が得られるものと期待される。

Ⅳ. はアルコール、薬物による肝障害と鑑別を要する慢性肝疾患のうち、とくに慢性肝炎・原発性胆汁性肝硬変がとりあげられ、鑑別診断という面を中心として論じられている。

本書の全体を通じ症例提示に用いられている顕微鏡写真は、光顕・電顕ともにきわめて豊富かつ鮮明である。肝疾患に関心を有する臨床医のみならず、広く一般臨床医にすすめたい好著である。

B 5 頁304 図94 写真129

原色図5 ¥9,600 ㊦290

医学書院刊